

「知つてる」  
「行く先が八百屋、お七の色男を小姓の吉三と云ふやろう、そこで胡椒を思ひ出し」  
「成程、何程が」  
「まだ云ふてる横町の八百屋で胡椒の粉二銭や早う行き」  
「ウフ怒りよつた、彼奴が苛立の處へ私が物覺へが悪いとききてるので痼癢を立てゝよる……八百屋のん御免やす」  
「ハイおいでやす」  
「一寸早まくだ出してんか」  
「何をだす」  
「二銭がんや」  
「品物は」  
「噓の出るもんや」  
「私處にそんな物は有まへん」  
「それが有るね一寸思ひ出し」  
「何をだんね」

「お前へ甚い鈍な男やな、あのくらい目標まで教へて貰ふてもう忘れたんか」  
「私知りまへんがな、貴郎何を買ひにお出なはつたんや」  
「お前以前火焙りになつた娘はん知つてるか」  
「其様な人知りまへんで」  
「誰でも知つてる、東京がまだ江戸と云ふた時分や」  
「其様な時分に行た事がないので知りまへん」  
「ア、難儀やな」  
「貴郎より私の方が餘程難儀だす」  
「一寸思ひ出しいな、それいな、ホイ」  
「モン何んだんね」  
「大傳馬町より引出されホイ、先には制札紙幟りホイ、罪の次第を書き立てホイ、同心與力を供に連れホイ、裸馬にと乗せられてホイ、チウのん二銭がんお呉れ」  
「私處に其様な物有まへんで」  
「有るね、ホイ」  
「まだだすかいな」